



「0 から海外講演～イギリス 4 大学への訪問～」

京都大学大学院・助教
A01 奥村 慎太郎okumura.shintaro.6e@kyoto-u.ac.jp

この度、第 2 回 Green Catalysis Lectureship Award を受賞し、イギリスの 4 大学 (Newcastle 大学, Manchester 大学, Bath 大学, Nottingham 大学) で講演する機会をいただいた。準備にあたり多くの渡航報告書を参考にした。本報告書も次に海外講演に行く方々の一助となれば幸いである。

[準備] 本講演旅行では、海外の研究者、特に今後長く付き合える若手研究者とのネットワークを構築することを目的とした。同世代の若手研究者が多く、また鉄道で各大学をめぐりやすいことから、イギリスへの渡航を選んだ。とはいえイギリスの友人は一人もいなかったため、まったくコネクションのない 0 からの準備となった。とりあえず会ってみたい若手研究者 5 人にメールを送ったところ、4 人から受賞の際にはホストができる旨の返事を頂いた (1 人は日程が合わず今回は断念した)。意外と受け入れてくれるものである。準備に関しては、ケムステ内の <https://www.chemstation.com/blog/2020/03/lecture1.html> の記事を特に参考にした。最初は格安の飛行ルートを考えていたが、初めての海外講演に万全の状態で見たい思いから直行便を選択した。円安と相まって、トータルで予算をオーバーしてしまったが、ホストの先生方に宿泊費のサポートが可能か相談したところ、全大学が 1 泊以上のサポートを承諾してくれ、予算内に収めることができた。

[講演全体を通して] すべての大学で、当日の予定は前日の夕方以降に送られてきた。講演は通常 1 時間か 1 時間半なので、それに合わせた 2 種類のスライドを準備しておいて正解であった。講演は毎回 30~50 人くらいが参加してくれたように思う。日本語での発表と同じ感覚でスライドを準備していたが、1 時間の英語発表は思ったより時間がかかり、後半部分は一部カットすることになった。



[夕飯・雑談] 初対面の先生との会話・雑談は、正直一番ハードルが高いところである。今回の訪問を通じて、基本的には日本とイギリスのシステムの違い (講座制など)、予算獲得の難しさ、研究室の学生の数、教育と研究の割合、PhD やポストドク環境などについて話していたように思う。そのため事前にこれらの内容を、英語表現を含めて頭に入れてから臨むと、より会話も弾むはずだと感じた。

[渡航報告]

1. ニューキャッスル大学 (2/3)

ニューキャッスル大学では Matt Hoppkinson 上級講師、Roly Armstrong 講師にホス



トをしてもらった。M. Hall 準教授, Andrew Pike (Director)、E. Gibson 教授, K. Izod 準教授らと有機合成に限らない様々分野に関する discussion を行い、自身の初講演もひとまず終えることができた。夜は Roly, Matt, Andrew らとともに、1 件目は地元ならではのパブに、2 件目はトルコレストランに連れていってもらった。正直、時差ぼけとお酒の影響で、最後の方は完全に思考停止してしまっていた。飛行機内ではスライド直しなどせず、時差ぼけ対策に努めたほうが賢明だったと感じた。

2. マンチェスター大学 (2/5)

マンチェスターでは Giacomo Crisenza 講師にホストしてもらった。Jordan Berreur 講師, M. James 講師, M. Greaney 教授, A. Trowbridge 講師と discussion し、講演を行った。夜は Giacomo に大学と街を案内してもらい、合流した Jordan と 3 人で夕飯を共にした。Manchester の化学科は規模が大きく、新進気鋭の若手研究者も多く在籍しており、大変よいネットワークを構築できた。



3. バース大学 (2/9)

バース大学では Alex Cresswell 準教授にホストをもらい、S. Horsewill 博士、S. Coote 上級講師, D. Scott 講師, J. Cadge 講師らと discussion をした。Arex に限った話ではないが、イギリスでは企業や他の研究者との共同研究が非常に盛んであることに驚かされた。また Alex 研では光フローシステムを用いた反応開発に取り組んでおり、光レドックス反応の課題であるスケールアップの難しさが解決されつつあることに感銘を受けた。

4. ノッティンガム大学 (2/11)

ノッティンガム大学は Mattia Silvi 准教授にホストしてもらった。化学科の建物である The Carbon Neutral Laboratory は外壁が木で覆われた斬新な作りであった。ここでは S. Woodward 教授, Miriam O'Duill 助教, H. W. Lam 教授, M. George 教授らと discussion をした。大学構内の立派なレストランで、Mattia, Miriam と昼食をとった後、講演を行った。質問も多数もらい、特に講演後に学生 2 名が質問に来てくれたのは嬉しかった。夜はイギリスらしいパブに Mattia と行き、大学構内にある快適なホテルに宿泊し、すべての日程を終えた。



渡航を通じて、計 20 名の初対面の先生方と交流することができ、普段では得難い濃いネットワークを構築できた。今回得た経験・交流を活かして、さらに研究者として邁進していきたい。最後に本申請を採択頂きました領域代表の大井先生、および国際活動支援担当の金井先生、稲木先生をはじめとする関係者の皆様に心より感謝いたします。